

中国雲南における定点観測の継続（2）

— 2005 年度・2006 年度調査報告 —

松 本 光太郎

はじめに

この調査報告は、東京経済大学雲南研究所のメンバーとして、2005 年度と 2006 年度に行った調査のまとめである（一部に 2004 年度の調査で未発表部分を含む）。2005 年度については、すでに本学の『コミュニケーション科学』第 26 号付属 DVD-ROM に、2005 年度のチーヌオ族の新年の祭り、テモクー節についての、デジタルコンテンツが収録されている。その意味では、同時期に調査報告を発表できずにいたことについては、読者に深くお詫びしたい。

なお、この調査にあたっては、雲南省シーサンパンナ・タイ族自治州景洪市の杜元偉氏、鄭曉波氏、ドライバーの蘇氏、チーヌオ郷政府の楊紹華氏、沙曉桑氏、白蘭氏、景洪鎮吉佐平寨村の則四氏、二大氏、ネスレコーヒー実験農場の山雲輝氏らから、多大な協力と援助を得た。ここに御名前をあげなかった方々も含めて、お世話になった全ての方々に心より感謝の言葉を申し上げる。

1. 景洪鎮吉佐平寨村

（1）2006 年 3 月

<作付面積の変化>

今回も、以前からはほぼ毎年訪問している、元村長の則四氏を訪問し、則四氏の持つ四カ所の農地における作物の作付面積の変化について、聞き取りを行った。

A. この村における最初の調査の際に訪問した場所で、これまでの調査報告の中でもたびたび紹介してきた。面積は約 30 畝（ムー）。1986-1987 年に則四氏が木を切って開墾した土地で、1992 年に則四氏が親から自立した際に、親から受け継いだ。元来はトウモロコシ、陸稲を主に植えて来たが、2000 年に国営農場の第 2 分場 16 隊に、35 年間、1 畝あたり 420 円で貸している（使用権を売買した）。現在の作物は、全てゴムである。

B. わずかながら水田のある場所で、水田は 1985 年に開墾した。1994 年に、親から受け継いだ。畑地は、その後で開墾した。水田、畑地を合わせて約 40 畝。トウモロコシを植えている。標高が高いため、これまで一度もゴムを植えたことはない。

中国雲南における定点観測の継続（2）

C. 2003年に、村内で土地の分配を行った際に入手し、同じ年に開墾した。約10畝。ゴムを植えているが、まだ育っていないので、間にトウモロコシを植えている。トウモロコシは5-6月に植えて、11月に収穫する。

D. 村落の集体林を、1997年に分配した。最初はトウモロコシで、1998年以後、ゴムを植えている。約30畝。昨年からはゴムの樹液を採取しており、現在は主に下草取りを行い、トウモロコシは植えなくなった。

以上の四カ所での農作業は、一カ所がほぼ4-5日で、終わったら次の場所に移動する。茶葉も栽培しておらず、野菜類も栽培していない。

以上の則四氏の農地の他、この村でも標高の高い場所で、上述のAの土地の上方にある土地一帯は、広東の商人が使用権を購入した。標高が高いので、山の中腹までがゴムで、それより上はトウモロコシを植えている。現在では、土地の使用権の売買は、村落全体の土地の総面積の40-50%を占めるまでになった。合計で約1,000畝になる。背景には、ゴムの価格の上昇があり、2005年はキロ当たり12元だったのが、2006年には20数元まで上昇した。買い付けは、この村へ上ってくる途中にある国营農場で行っている。

他方で、焼畑耕作を行う人が少なくなっており、作物のほとんどはゴムになってしまった。砂仁、パッションフルーツ、マンゴー共に失敗したが、ゴムだけは成功している。また、退耕還林は、Bの農地の付近では行われている。

<住居の変化>

現在では、ゴムを売って得たお金で、住居を新築する人が増えている。他方で、レンガやセメントなどの価格も上昇し、物価も高くなっている。

この村落の総戸数は72戸、そのうち7戸がすでに、洋風の現代的建築の住居を建てて住んでいる。一戸当たりの建築費は95,000元。景洪の建築技師（建築隊の社長ということなので、専門の技師ではなく、セメント作りの住居専門の職人であると思われる）が設計し、四川省から来た労働者が建築作業に携わった。

これまでの伝統的住居については、同じ高床式でも、タイ族とハニ族では相違があり、タイ族の高床式住居の方が柱の数が多く、優れた設計であるという。ハニ族の場合には、斜面上に建てることから、頑丈に建てる必要がある。柱の数は、細い材木の場合は16本、太い場合には14本である。また、タイ族の場合には、大部屋に住むが、ハニ族の方が小部屋にしきって住むという違いもある。

新築された西洋風の住居は、一般に二階建てであるが、一階にも二階にも住めるようにした点が、二階だけにすむ旧来の高床式住居との相違でもある。西洋風の住居を好む理由の一つは、高床式住居の寿命が30-40年間であるのに対して、洋式の方が30-50年と、やや長く住めることがある。なお、則四氏一家の場合には、則四氏の長兄と次兄もまた洋式の住居を新

築し、父親は旧来の高床式住居に住んでいる。村落全体で7戸のうち、少なくとも3戸が則四氏の親族のものである。

なお、学校については、現在では小学校は村内ではなく、嘎棟郷の小学校まで、十数人の児童を四台のトラクターで毎日送迎している。村内では、小学校入学以前の児童に対する学前班を、以前からこの村落で教えて来たタイ族の女性の教師が教えており、ハニ語と漢語のバイリンガル教育を行っている。

(2) 2007年2月

<農地利用の変化>

今回は、則四氏の農地だけでなく、これまで同氏の農地を訪問する際に同時に見ることができた周辺の農地を訪問し、この村落全体における農地利用の変化について聞き取りを行った。

1) 上述のAの農地とその周辺。則四氏の農地よりも左手に、この村落の水源林があり、水源林は永遠に切ることはできないが、それ以外は山の上まで全て開墾してしまったという。現在では畑を焼くこともほとんどなくなり、せいぜい雑草などを焼くだけになった。また、伐採した樹木は家に運んで燃料にした。

2) 2006年のところで言及した、広東の商人が土地使用権を購入した場所。この村落では一番標高の高い場所の一つであるにもかかわらず、山の頂上までゴムを植えている。海拔1,100メートルのところでも、実際にはゴムを栽培することは可能であるという。また、ゴムの木と木の間には、パイナップルを植えている。パイナップルは、これまでの調査報告でも言及した、百果洲会社が買い付けている。同社は、果物であれば、なんでも買い付けるという。また、山麓に、広東商人の管理室が建てられていた。

3) 則四氏のBの農地へ行く途中で、以前は退耕還林を行っていた場所。以前は退耕還林を行い、沙松を植えたが、現在では全て切っけし、全てゴムを植えている。ゴムの木がまだ全体として小さく、植えてからまだ1年ほどだという。6年目以降、樹液を採取できる。現在は、トウモロコシも植えている。ゴムの苗木を植える場合には、左右の間隔が2.5メートル、列と列の上下の間隔は8メートルである。

4) 上述の3の場所の近くで、元は広東の商人がタイから導入した品種のタマリンドを植えていたが、これらも全て伐採して、現在は全てゴムを植えている。

次に、村落全体の状況について、簡単にふれておく。

まず、ゴムの栽培面積は、村落全体で約5,000畝、そのうち広東の商人のものが1,260畝、村民のものが3,400畝である。ただし、村民の植えている面積が小さい場合には、必ずしも申告しないので、実際にはこの数字よりもさらに多くの場所にゴムが植えられているものと推測される。村落全体の土地総面積は10,000畝余りで、水源林は約1,000畝である。村落面

中国雲南における定点観測の継続（2）



写真1

上：変化しつつあるハニ族の村落

左下：新旧折衷型

右下：新築された家屋

積の約半分がゴムを植えていることになる。

退耕還林については、2007年の時点で170.6畝であり、契約自体はまだ続いているという。茶葉を栽培しているところはない。

<住居の変化>

2006年の部分で述べた、洋式住居への変化であるが、これはこの村だけの問題ではなく、シーサンパンナ全体の問題であり、指導者の間でも、必ずしも意見が完全に一致しているわ

けではない。2006年11月23日の『雲南日報』に掲載された「風景区異化建築愈演愈烈，版纳傣家竹楼岌岌可危」によれば、シーサンパンナでも有名な観光地でもあり、国家4A級に指定された傣族園でも、収入を得た住民が、自分のお金で洋式の住居を新築しようとして、傣族園の管理者との間で紛争となり、結果として一つの住居の半分がタイ族式、もう半分が洋式という折衷型の住居が建てられ、高床式住居の保存を売り物にしている傣族園にとって、大きな痛手となったことが報道されている。

この問題に関して、シーサンパンナの住民が現代的な洋式住居を建てたがっているのに対して、政府は補助金を出すことにより、民族的な高床式住居を建築、保存して行きたいという構図になっている。ハニ族の村における住居の変化も、こうした流れの一つである。何より、この村を初めて訪れた時、観光地化からははずれた、言わば無名の村に、見事な高床式住居の一群を見だし、折しも白い花が咲き誇り、まさに桃源郷そのものであった。そしてまた、これまでの調査報告でも言及し、本稿でも後述するチーヌオ族のパーピャオ村の事例も、こうした問題と無関係とは言えない。チーヌオ民俗山寨内の住居が、すでに必ずしも伝統的なものとは言えなくなっている一方で、被災して移住した村落の復興に政府が補助金をつけ、チーヌオ族の高床式住居を、チーヌオ郷政府へと向かう道路沿いのよく見える場所に建てようという、明らかに政策的な意図が感じられる。

住民の願う発展のモデル、理想と、政府の指導者、そして海外の研究者が求めるモデル、理想についてのすれ違いは、現在でも、そして今後も論争が続いて行く問題である。周辺の東南アジア諸国、なかでもタイのチェンマイと比較してみてもはどうだろうか。なぜなら、チェンマイに出張、研修、観光で行ったことのあるシーサンパンナの人々は、チェンマイを一つのモデルであると感じている場合が多い。チェンマイと比べた場合、シーサンパンナでは、明らかに仏教寺院が圧倒的に少なく、規模も小さい。そして急速に経済発展していること、そして同時に急速に中国化していることに、大きな違いがある。メディアの与える、豊かな生活のイメージも大きく異なる。多文化共生のコンセプトを、住民一人一人の生活感覚として実感できるまでには、まだ相当時間がかかるであろうし、それ以前にシーサンパンナがなんら特徴のない場所になってしまう危険の方が大きいであろう。中国政府の政策も、それが中国全土で一貫したものである以上、少数民族が経済的に豊かになることが目標であっても、各民族本来の文化やアイデンティティが強まることを、単なるスローガンではなく、実感を伴うものとして目指しているかどうかは、非常に疑わしいと言わざるを得ないだろう。特に、新疆での伝統的住居の取り壊しとごく一部の観光資源化、あるいは雲南で言えば、すでに1990年代にそれなりに整備された回族の集中する順城街の取り壊し、強制的とも言える住民移転、そしてそこに超豪華マンションを建設して、回族街の香りを消滅させてしまったこと、これらとどこかで一体となっているのではないだろうか。

2. チーヌオ族のテモクー（新年）の変化

（1）2005年3月

<民俗山寨の変化>

すでに2004年度調査報告において、民俗山寨が団体旅行用の観光ルートから外されてしまったため、観光客がほとんど訪れない状況に陥ってしまったことはすでに述べた。今回の調査でも、民俗山寨は2004年5、6月に営業停止に追い込まれ、管理人が置かれているだけだという。経営権がないため（後述するように、湖南人商人から森林公園会社に経営が移った）、郷政府としても経営に口を挟むことができずにいる。そして、2005年1月に営業を再開し、一日二回、歌舞を上演するようになったという話であった（しかし、実際には「この二日間」しか再開していない、つまり筆者が訪問した時期に合わせて人員を配置してくれたということのようであった）。従業員は全員で48人であるが、筆者が訪問した日には5-6人程度の人が出勤していた。この日は、「雨が降ったので、歌舞は中止」ということで、これまでの調査報告でも問題にしてきた太陽鼓も、一部が壊れたままになっていた。

今回の調査では、民俗山寨の園内の案内図を撮影することができた。観光客が歩くルートは、「太鼓門」-「祖先マーヘーマーニュー」-「創世の女神アモアボ」-「太陽花壇」-「チョーバーの家」-「歌舞レストラン」-「大公房（ロングハウス）」-「歌舞用の広場」-「牛角路」-「江沢民前主席が訪問した農家」-「自然村」-「村民娯楽場」-「原始森林」-「出口」となっている（この他に、東門の側に展覽場があるようだが、判別できない）。そして、園内のサービスには、宿泊、歌舞レストラン、「原始部落」の出し物、喫茶コーナー、カラオケ、太陽ヒーター温水器、マッサージ、シャンプー、フェイスクアなどがある。この取材時点では、気がつかなかったが、2007年のテモクー取材後に案内された、「原始部落」の出し物は、すでにこの時点で存在、あるいは計画されていたことがわかる。また、前回の調査報告でも紹介した、バーカー村の民俗博物館も、経営状態はあまりよくないという。

<商品作物の概況>

チーヌオ山が、シーサンパンナ、ひいては雲南省全体の中でも、山地の生態学条件の多様性に即した農業開発のモデル地域（いわゆるシーサンパンナ・モデル）であることは、この雲南研究会、雲南研究所が創設された時からの研究課題である。以下、郷政府からの聞き取りに基づき、商品開発の歴史と現状について概観しておく。

はじめに指摘しておくべきことは、チーヌオ郷政府の財政状況で、2004年の財政収入は69万元、上級政府の援助が40数万元で、これに対して財政支出は403万元もかかるため、さらに上級政府から300万元以上の融資を受けているという。チーヌオ郷は「貧困地区」に指定

されている。

主な商品作物は、第一位がゴム、第二位が茶葉、第三位が漢方薬の砂仁である。この砂仁がチヌオ山における農業発展の上で最も重要な役割を果たしていたことは、これまでの調査報告で紹介して来た通りである。そして、一時期、この砂仁栽培が行き詰まりかけた際に、当時の江沢民主席がチヌオ山のある農家を訪問して、実情を視察し、1989年11月19日に「必ず、チヌオ族を豊かにする必要がある」と述べたことは、現在でもチヌオ族の人々に明確に記憶されている。そして、前回の調査報告で紹介した、民俗山寨のガイド用のテキストには、砂仁の価格を調整したという話が載っていた。しかし、今回の聞き取りでは、砂仁の価格は市場価格であり、江沢民訪問後に急に上昇したわけではなかったらしい。砂仁の買い付け価格が一番高かったのは、1994年-1996年の数年間で、キロ当たり60元、それ以前は15-20元、またこの二年ほどは20-25元というところであるという。砂仁は、現在では最も主要な収入源ではなくなったが、1980年代に経済発展が始まる際に大きな役割を果たしたという。当時は、チヌオ山はモデル地区であった。現在でも、16の村落は砂仁からの収入に依存しているが、それは最も利益の高いゴムは標高が高いために植えることができないからである。

<「古茶節」の開始>

「古茶節」とは、明清の頃から「六大茶山」の一つとして知られるチヌオ山の茶産業振興のために、2005年から行われるようになった祭典で、実際にはテモクーの時期に行われる。わかりやすく言えば、テモクーに来た来賓や観光客に「チヌオ・プーアル茶」を宣伝する機会である。これについては、後でまたふれることにする。

チヌオ郷政府の手前には、比較的大きな茶工場がある。聞き取り調査はしていないが、記念碑などの資料からある程度の事情を知ることができる。すなわち、基諾山茶廠（または基諾山茶場）は、1988年に創業されたシーサンパンナ・青山茶業有限公司が経営する三つの茶葉加工場のうちのひとつで、2003年に完成した。これは、「景洪市基諾郷国家扶貧開発項目」の一環であり、「基地+工場+農家（農戸）」の三者をセットにした扶貧（貧困対策）モデルであり、総投資額257万元のうち、扶貧融資が100万元、自己資金が157万元で、工場の面積は4,000平方メートルである。二種類の生産ラインがあり、『基諾山プーアル茶』など、いくつかのブランドがある。工場内には、茶葉買い入れの際の等級別についての規定が掲示されていた。

また、上述の「景洪市基諾郷国家扶貧開発項目」との関連については未調査であるが、「景洪可持発展実験区生物多様性保護与生態回復技術示範研究項目」の一つとしての「景洪市可持発展示範村」についての碑文があった。2003年8月に建てられているので、時期的には重なる。なお、「項目（プロジェクト）立項単位：雲南省科技厅」、「項目実施単位：景洪市可

中国雲南における定点観測の継続（2）

持続発展実験区協調領導小組」,「景洪市林業区」と記されており,よく言われる中国の縦割り行政と横の関係の調整についてうかがい知ることができる。

<バーピャオ村移転の記念碑>

チーヌオ山のバーピャオ村が自然災害にあい,移転を余儀なくされ,政府の援助により,郷政府手前の場所に新しい村が建設され,高床式住居の伝統を維持した新築の家屋が多数建設されたことについても,以前の報告でふれた。今回の調査では,これを記念した『巴飄村搬遷記念碑』を見ることができた。2003年11月30日に建てられた碑文で,2002年夏にバーピャオ村が地滑りに遭い,巨大な損失をこうむったが,省,州,市の党と政府,関係部門が援助するとともに,香港の赤十字を通じた有志により,約556,500元の義援金が寄せられ,53戸の被災民の復興に貢献したことが記されている。

なお,バーピャオ村の農地は元の場所にあり,距離的には遠くなったが,同じ農地を耕作している。本来は砂仁のモデル地域であったが,現在では主にゴムと茶を栽培している。

<高速道路建設>

雲南省昆明とタイのバンコクを結ぶ高速道路が,チーヌオ山の三つの村落の近くを通る予定である。三つの村落は移転しないが,農地の一部が占有されるので,州,市の政府から補償がされるらしい。

<アルファベットのチーヌオ文字>

チーヌオ族は,「解放時には,原始社会の末期にあり,言語はあるが文字を持たない」ということが繰り返し説明されて来たが,これに対して国際音声字母を用いた,試験的なアルファベットのチーヌオ文字を制定しようという動きがあるという。まだ実用段階ではなく,パソコンの中に保存されているという。

(2) 2006年2月

<チーヌオ民俗山寨のその後>

上述のように,経営不振に陥っていた民俗山寨を,2004年にシーサンパンナ森林公園会社が買い上げたが,その後再び営業停止に追い込まれ,2006年の水掛祭り(ほぼ四月中旬)の前までに改築工事を済ませ,営業を再開する予定であるという。森林公園会社は,本来の名称は金州集団会社で,元々は浙江省のプラスチック製品の広告会社であった。最初に買い上げたのが森林公園なので,通称は森林公園会社と呼ばれるが,その後はモンヤンの野象谷(元の植物園),続いてチーヌオ民俗山寨を買い上げた。営業規模は大きく,毎年4-6億元を納税しており,シーサンパンナ州の大きな財源である。ただし,シーサンパンナの観光業は

全体として沈滞気味であり、観光コース等の再編成が必要であるため、野象谷と民俗山寨を買い上げて、一つの観光コースに再編成しようとしているところだという。上述の「原始部落」は、もともとは森林公園の中にあったもので、これが民俗山寨の案内図の中に書かれるようになったのも、「原始部落」をチヌオ民俗山寨にくっつけて、新たなコンセプトで仕上げようというねらいのものであるが、これについては2007年のテモクーに関する部分で後述することにする。

＜観光用テモクーの「復活」と政府のテモクー＞

2006年のテモクーについては、すでに『コミュニケーション科学』第26号付属DVDに映像コンテンツとして収録されている。この2006年のテモクーは、停滞している観光開発、すなわちチヌオ民俗山寨の現状をどのように打開するかという点で、大きな意味を持っていた。

2006年の政府によるテモクーは、会場を民俗山寨に移し、広場を挟んで、ちょうど正反対の位置に来賓席を設け、来賓の側を向いて歌舞が演じられる、つまり従来からの階段状の観客席に背を向けて演じられるという方式がとられた。このことは、2006年のテモクーの持つ意味、つまりチヌオ族における観光開発を何とか再開するためのセレモニーであるということ象徴していた。

参加した来賓の氏名・役職とプログラムの詳細は、上述のDVD収録のデジタルコンテンツの字幕に書かれている。来賓については、単に地元の政府に敬意をはらったということではなく、現在のシーサンパンナの政府の指導者の顔ぶれとかつてのシーサンパンナの土司、つまり旧支配層との関係を知る上で興味深い。ここでは、上演内容の変化とその意味について、簡単にふれておくことにする。これらをどう理解するかについては、ぜひDVDのコンテンツを御覧いただき、読者の皆さんが自分で判断して下さることを願っている。2006年のテモクーは、会場が郷政府広場から民俗山寨に移されたため、映像撮影も民俗山寨一カ所で「観光用のテモクー」と「政府によるテモクー」の両方を同時に撮影することができたわけである。

2006年のテモクーのプログラムは以下の通りである。

- 1) 「祭鼓、祭茶」(大太鼓とお茶の儀礼) : パーポー文芸隊
- 2) 「祭鉄房」(鍛冶屋を祭る儀礼) : ザーグウオ文芸隊
- 3) 「備耕」(春耕前の儀礼) : ザールウ文芸隊
- 4) 「基諾大鼓祭」(チヌオ大太鼓舞) : 民俗山寨(二部構成)
- 5) 「遮克追」(チョークーチュイ: 創世の女神を祭る踊り) : 郷老協会
- 6) 「創世女神」(創世の女神の踊り) : 民俗山寨
- 7) 「大鼓舞」(大太鼓の踊り) : パーピャオ文芸隊

中国雲南における定点観測の継続（２）

- 8) 「愛我中華」（私の中華を愛する）：バーヤー新寨
- 9) 「東卓哈楽」（トーチョーハルル）：生牛文芸隊
- 10) 「奇科」（チークー：狩りの歌）：民俗山寨
- 11) 「特懋妞」（テモニュー）：参加者全員

全体として、前回（2004年）のテモクーよりも工夫を凝らした内容になっていたが、いくつか気がつくことがあった。第一に、創世の女神に関する出し物がそうであるように、同じ演題で二種類のプログラムが演じられたことである。創世の女神の場合は、初めに郷老協会によって演じられた方は、多少の脚色はあるとはいえ、伝統芸能的な印象を与える内容であった。これに対して、後から演じられた方は、黒いスパッツの上から水着を着た女性たちと、上半身裸で肌に褐色の塗料を塗った男性による一種の寸劇のような内容で、明らかに「原始」のイメージの過剰なまでの演出と、ほぼ水着姿の若い男女を売り物にしたものであった。言い換えれば、伝統芸能的な従来のテモクーの出し物と、民俗山寨をてこ入れした、より集客力のあるプログラムの両方を、同時に演じたものである。狩りの歌についても、同じ事が言える。前回は、竹を用いて作った楽器演奏の出し物であり、それなりに味わいのある内容であったが、今回は上半身裸の若者の「原始的」な歌舞であった。他方で、鍛冶屋の儀礼や春耕前の儀礼など、伝統芸能的な出し物もより充実してはいるが。

第二に注目すべき点は、「私の中華を愛する」という歌舞の中で、中国の民族識別工作の中で、依然として「未識別の集団」である、コングー人（空格人）の女性一人が、最前列に出て、来賓席の政府の指導者の前で踊ったことである。コングー人を単一民族として承認することは、中国政府が民族識別工作进行を凍結したままの状況からすれば、不可能ではあるが、こうした形でコングー人に対する一定の配慮を見せようという意図が感じられる。

第三に、前回は、日本の追儺（ついな）、つまり節分の豆まきにあたる、「ガチュレー」の出し物が省略されてしまったことである。2007年には復活したが、服装などは前回の方がリアルであった。

<古茶節>

今回の聞き取りでは、上述の古茶節は2005年ではなく、2004年にすでに開始され、政府のテモクーのプログラムにその趣旨が反映されているということであったが、2004年の記録からは確認できなかった。しかし、2006年のテモクーでは、上述のようにプログラムの中に、「祭鼓、祭茶」（大太鼓とお茶の儀礼）と明示されていた。ただし、実際には大太鼓（太陽鼓）を祭る儀礼を行っただけで、茶に関する明確なモチーフは見受けられなかった。これに対して、2007年のテモクーでは、茶に関する独立した出し物があり、プログラムにも「2007年テモクー兼第二回チーヌオ古茶節」と明記されていたので、対外的には2006年に第一回の古茶節が行われたということの意味するのであろう。

この古茶節が行われたことによる宣伝効果としては、茶葉の買い付け価格が、キロ当たり 1.0 元だったのが、2.5 元に上昇したことであり、茶葉の作付面積も 14,000 畝（ムー）に拡大し、目標は 20,000 畝だという。

そして、今回は会場で来賓向けに配布されていた「基諾山茶場 出自古六大茶山攸楽之茶」というカラー印刷のパンフレット入手することができた。表紙の左上には、「伝承“攸楽普洱”貢茶輝煌，精創“基諾普洱”現代珍品」というキャッチフレーズが入っている。民国時代までの地名である「攸乐山」（現在でも地元の漢族はこの名称を使用）からの貢ぎ物としてのプーアル茶の伝承を受け継いで、現在の「基諾山」の珍品（名品）としてのプーアル茶へ、ということであろうか。発行は、雲南西双版纳青山茶業有限公司基諾山茶場である。雲南のプーアル茶と言えば、ハニ族の南糯山の茶葉がすぐに連想されるが、ここにチーヌオ族のブランドが登場したわけである。以下に、その内容の一部を引用しておく。

「基諾山茶場は、（中略）西双版纳青山茶業有限公司の分支企業で、従業員は 166 人、無性系純品系優質良種モデル茶園が 1170 畝あり、国家の『両山』（貧困対策モデル地域で、シーサンパンナではチーヌオ山とプーラン山が指定されている）貧困援助プロジェクトの実施と結合し、二本の茶葉生産ラインを有する加工場が一つあり、全基諾族郷 1.3 万畝の生態茶園に向けて茶葉の買い付けを行い、基諾族農民の茶葉が売れない実際問題を解決した。茶場が生産する延聖牌緑茶系列には、基諾山碧螺春、長寿龍春、還童毛峰、青山小曲などのブランドがあり、基諾山牌プーアル茶系列には、6 + 1 古樹茶七子餅（伝統的な六大茶山に南糯山の茶樹王を加えた七種類で、七子餅とは伝統的な円形に圧縮したプーアル茶のこと）、基諾山古喬木茶七子餅、基諾山生態茶七子餅、基諾山雪毫七子餅、基諾山熟プーアル茶七子餅など、多品種の緊圧茶と散茶がある。

（中略）基諾山は北回帰線以南にあり、亜熱帯気候に属し、全年茶樹生長日は 100 %，土中の有機質は比較的豊富で、茶園の周囲は西双版纳の原生林に囲まれており、無工業汚染区で、良好な植被に保護され、生態系統は最も整っており、最もバランスが取れており、茶葉の品質に最良の生態的保証をもたらしている。」

基諾山茶場は、2005 年 4 月に「国家扶貧龍頭企業」に指定されている。

<商品作物の現状>

かつては、第一位の商品作物は砂仁であったが、現在では価格は低い。また、砂仁を植えられる場所には、すでに植えている。現在では、第一位がゴム、第二位が茶葉、第三位が砂仁である。ゴムは、昨年、一昨年と価格が高く、キロ当たり 10-12 元。2005 年のチーヌオ郷の農民の平均年収は 1881 元であるが、ゴムの収入だけで 2000 元以上になる場合もあるという。2000 元とは、国家による貧困対策援助の対象となる基準額である。

土地の使用権売買は、ハニ族のところだけでなく、チーヌオ族でも多い。一般には、25 年

中国雲南における定点観測の継続（2）

間の使用権を売る。仮に 20 畝の場合には、1 畝当たりゴムは 33 株植ええられるので、600 株以上になる。外地の会社、商人が土地の使用権を買いに来ており、景洪だけでなく、全国から買いに来ている。

（3）2007 年 2 月

<政府のテモクーの変化>

2007 年 2 月の政府のテモクーについては、東京経済大学コミュニケーション学会発行の『コミュニケーション科学』付属の DVD に、撮影したビデオに字幕をつけて紹介する予定である。ここでは、プログラムの概要と、これまでとの変化についてふれておくことにする。

司会は、景洪市人民政府副市長の岩亮（アイリヤン）氏が務めた。

1. 2007 年チーヌオ族テモクー節兼第二回古茶節祝賀行事開会宣言
2. 主要な指導者と来賓の紹介
3. 主要な指導者と来賓の講話
4. 民族習俗活動，文芸プログラム（司会は楊紹華氏と唐海英氏）

（1）祭祀活動

- 1) チーヌオ族の七人の長老の祭祀
- 2) チーヌオ族の七人の長老と州，市，郷の主要な指導者による太鼓の祭祀

（2）文芸プログラム

- 1) 「祭鉄房」（鍛冶屋を祭る儀礼），「備耕」（春耕前の儀礼）
- 2) 「嘎柱列」（ガチュレ：日本の追儺に似た，新年を迎える儀礼）
- 3) チーヌオ族の三大氏族（アシ，アハ，ウヨウ）の民族衣装と歌
- 4) チーヌオ族の民間楽器演奏（七種類）：郷老協会
- 5) 茶の祭祀と踊り：ストゥー老寨，児童
- 6) 「奇科」（チークー：狩りの歌）：バーピャオ
- 7) チーヌオ族の祝い酒の歌：民族山寨
- 8) 涼拌茶：バーピャオ
- 9) 「特懋妞」（テモニュー）：民俗山寨
- 10) 「阿莫腰白」（アーモーヤオバイ：創世の女神）：
チーヌオ族民間歌手のチェブロー
- 11) 「司土高」（スートゥーガオ：集団での踊り）

以上のプログラムを、2006 年 2 月と比較すると、まず目に付くことは、前回の創造の女神の演目のように、「原始」のイメージやほぼ水着姿の若い男女を強調したような演出がトーンダウンしたことであり、また会場が民俗山寨から、元来の郷政府前の広場に移ったことも含めて、通常の政府のテモクーのテイストに戻ったことである。そして、今回の場合には、チ

一ヌオ茶の販売促進ということが全面に出され、茶に関係のある演目が増え、同時に「原始」というよりも「原生態」が基調になっていた。チーヌオ族の民間楽器の演目と涼拌茶の演目が大きな比重を占め、同時に児童による茶の踊りでも、子供達は茶樹と茶摘みの服装を着て遊戯を行った。これら以外でも、日本の追儺に似たガチュレが復活したことも、新年の儀礼としてはふさわしいものであるが、服装は以前の民族衣装的なものから、ジーンズをぼろぼろに裂いて作った衣服を着た若者による、現代的なテイストのものに変わったが、こうした演出の仕方が今後どのようなようになるのか、今後の変化を見守りたい。

同時に気になったのが、涼拌茶の演目の中で、観客席最前列の政府の指導者や来賓に対して、実演して作った涼拌茶を勧めていたが、果たしてこうした、言わば生ものとも言えるメニューが、どれだけ多くの人々にアピールできるかという問題である。シーサンパンナ、特にその州都の景洪における観光開発の歴史を振り返っても、1980年代にはまだタイ族本来の民族料理が出されていて、それは私のような日本人の好みに合うような、焼いたり、蒸したりのメニューと生ものであったが、その時期にシーサンパンナを訪れた漢族の人々にとっては、油をつかっていためた料理ではないこと、生ものを食べるということが、どうしてもあまりなじめないものであった。その後、中国国内からの観光客が急増して行く中で、景洪の食文化は大きく変化し、炒め物を中心にして、伝統料理をそこに多少アレンジした形へと変容していった。こうした景洪でのタイ族料理の変遷から考えると、チーヌオ族の新しいメニューが、中国国内からの観光客に果たしてアピールできるかどうか、不安がないとはいえない。「原生態」を求めて来た人々が、そこに通常の中華料理以上の価値、新鮮さを見いだすか、単に違和感を抱えて帰ることになるかは、微妙な問題である。日本人が日常的に生もの、刺身などを洗練された料理として享受するように、チーヌオ族の新しいメニューが特色を生かして洗練されて行くのか、それとも一時のブームに終わり、タイ族同様に中華料理化していくか、今後の変化を見守りたい。

<チーヌオ民俗山寨の変化>

政府のテモクーの終了後、チーヌオ郷政府の御厚意で、案内のガイドに同行してもらい、園内を一周した。何はともあれ、それなりの観光客が訪れていることに、安堵するものがあった。内容については、ここではあえて立ち入ったコメントをせず、概要を紹介し、判断は読者に委ねることにしたい。

まずは、チーヌオ民俗山寨の入り口であるが、ガラス窓の券売所が整備され、駐車場には大小、数台の観光バスが駐車していた。数組の団体が来ているということである。同時に、入場料が一人 130 元に値上げされ、かつその中に後述する「土着部落」の料金である 100 元が含まれていると表示されている。つまり、チーヌオ族に関する部分については 30 元だけなのである。

中国雲南における定点観測の継続（2）

坂を登って行くと、例年のテモクーのプログラムにも入っている、竹で作った楽器の演奏を数人の男女が行っていた。その中には、元文化センター長の沙車（サーチャウ）氏の姿もあった。なお、この竹の楽器の演奏は、NHKで雲南の「里山」をテーマにした、短時間番組の中でも紹介されたことがある。もちろん、その番組では、こうしたチヌオ民俗山寨の全貌はカットされ、自然の中で生活しているという風な紹介のしかたであった。

山の上に上がると、チヌオ族の「トーテムポール」を初め、展示室なども含めて、全体として観光用の設備が整備されたことがわかる。とくに、チヌオ族にかつてあったとされている「大公房」（ロングハウス）や、「卓巴（チャーバー）房」（長老の家）、広場の前の土産物店内部の展示が大幅に整備され、展示品も整えられ、学術的な内容も十分に織り込んだ解説のボードが配置され、同行したガイドも非常に詳しい解説をしてくれた。こうした点では、以前の休業状態になっていた頃とはもちろん、このチヌオ民俗山寨が最初に作られた当時よりも充実した内容になっていた。チヌオ族女性数人による、地機での織布の実演も、違和感なく静かに行われていた。

広場では、以前とほぼ同様に、観光客向けの「テモクー」が披露された。年に一度のテモクーが毎日上演されることの意味をどう考えるかはともかく（考えて見れば、景洪ではタイ族の水掛祭りが毎日数回上演されているのと同じであるが）、上述のようにそれなりの人数の観光客が来ており、何よりまたこうした歌舞が復活したことはともかく感慨深かった。

広場を後にして、「高架栈道」という長い木の階段を降りて行くと、10余りのエリアから構成された「土着部落」へと入って行く。念のため、ここでいう「部落」とはマルクスの理論でいう、「民族」形成以前の原始的な社会集団のことを指す。この「土着部落」については、東京経済大学雲南研究所（雲南研究会）のこれまでの調査報告でもふれてきた、元は景洪の原始森林公園内にあったアトラクションの一つである。この内容を含めて、チヌオ民俗山寨に入場する際に配布された、新しく印刷されたチヌオ民俗山寨のパンフレットの一部を引用することで、説明に代えたい。このパンフレットの表紙には、まず左上に「金孔雀之城」のロゴがあり、そしてタイトルは「原始氏族部落的最後家園 基諾山寨」である。

「チヌオ山寨は、全国唯一の、最も全面的、集中的にチヌオ文化を展示することを主題とした原生態観光ポイントであり、中国最後の一つの少数民族である（訳注：民族識別工において最後に承認されたことを意味する）チヌオ族を理解するための窓である。チヌオ族の発展は比較的緩慢で、1950年代の初期にもまだ原始社会の末期から社会主義社会へと向かう過渡期にあり、一年中世界から隔絶され、焼畑工作を行い、木に印をつけて文字の代わりとし、生産力がかなり低い原始的な生活に終始していた。チヌオ山寨は、『基諾族原始氏族部落最後の園地』であると言われ、自然の村落に依拠して、チヌオ族の濃厚な民族風情、歴史文化、神秘的な原始宗教、純朴な生産労働方式特有のチヌオ族の民家と美しい自然が一体となって、観光客の前に現れる。チヌオ族の最も盛大なお祭りである『テモクー』。

ここであなたは、独自の特色を持った民族風情を鑑賞するだけでなく、美しい伝説上の創造の女神である『アーモヤオボー』の物語も聞くことができる。『マーヘーマーニュー』に対する祖先祭祀とチーヌオ族大鼓舞は、あなたに震撼と喜びを感じさせる。同時に、あなたは濃厚で純朴なプーアル茶文化を味わい、無料で各種の季節の野生の果物を味わうこともでき、あなた自身をチーヌオ族の中に置いてみるができます。『一日チーヌオ人』になる楽しみを味わうことができます。高足踊り（訳注：案内図にはなく、該当しそうなのはガラス踏みの芸、実際に回ったなかではブランコか？）、竹竿の曲芸（訳注：案内図には、実際に回った中で共に該当しそうなものはなかった）、鍛冶屋、弩（いしゆみ）などの伝統スポーツにあなたが参加し、中国とラオス、ミャンマーの辺境地帯からやって来た土着の人々の原始的な生活様式と風俗を体験するのを待っています。鳥人、歯の黒い人、歯の赤い人、首長人、大耳穴人（訳注：巨大なイヤリングの穴の女性）、樹上を飛ぶ人、樹皮や木の葉を食べる人、生肉を食べる、生き血を飲む、牛の供犠など、あなたに意外な収穫もあります。人と蛇の踊り、火を食べる、火をくべる、火を踏む、火を吐く、刀のハシゴ上りが、あなたに驚きの中の刺激を与えます。党と指導者は、この最後の一つの少数民族のことを非常に重視しており、江沢民総書記、胡錦濤総書記、温家宝総理など国家の指導者が自ら慰問に訪れた。ここであなたに自然に回帰するという人生の楽しみを届け、シーサンパンナの風土人情を本当に味わっていただきましょう。」

参考までに、こうしたアトラクションの写真を示しておく（写真 2 参照）。もしも可能であれば、ここを訪れた観光客に対するアンケートをすれば、どのような受け止めがあるか知ることができるかもしれない。

<基諾山茶場の新パンフレット>

昨年の政府のテモクーで正式に開始した古茶節は、2007 年 2 月の政府のテモクーのプログラムの中でも重要な位置を占めていたことは、すでに述べた通りである。今年も、カラー印刷されたパンフレットが配布されていたが、昨年がそうであったように、これはあらかじめ決まっている来賓向けのようで、テモクーを見に来た一般の観光客向けには配布されていないような印象を受けた。この点は確認する必要があるが、政府と会社からの来賓に向けて、このパンフレットと、巨大な図案の形に押し固めたプーアル茶がお土産に渡されているようであり、そうしたルートを通じての販売促進という発想が感じられた。

今年のパンフレットは、全体の配色は昨年と同じであり、一見すると昨年のパンフレットと変わらないように見えるが、以下のように、いくつかの変更点があった。

- 1) 昨年は中国語だけであったが、英語と中国語の対訳になった。
- 2) 昨년이合計 6 頁で、チーヌオ茶の紹介だけだったのが、8 頁になり、チーヌオ族の風俗習慣や自然環境などのイメージを伝える内容が追加された。具体的には、「得天独厚

中国雲南における定点観測の継続（2）



写真2

左上：「茶樹はお金のなる木」 左中：茶工場の宣伝 下：テモクー会場の入り口
右上：チヌオ民俗山寨の入場券売り場 右中：「土著部落」の出し物

的「太陽鼓」牌普洱茶」（これしかない太陽鼓ブランドのプーアル茶）、「風景这边独好」（こちらの気候はよい）、「基諾山風土人情」（チーヌオ族の伝統的茶文化）である。かっこ内は、説明文の要約である。

- 3) それに伴って、パンフレットの表紙中央にあるロゴが、昨年はおそらく太陽鼓であると思われる図案の上に、中国語とローマ字でそれぞれ「基諾山」「JINUOSHAN」と書かれていたのに対して、今年の場合には図案は同じで、文字が「太陽鼓」「SUN-DRUM」に変わっていた。この「太陽鼓」は、以前の調査報告でも述べたように、チーヌオ族自身にとっては「大鼓」の意味しか無く、「太陽」というイメージ、解釈は漢族側から見た場合のものであった。同時に、2006年の調査についての記述の中で紹介した、茶工場の前の記念碑の写真と、チーヌオ民俗山寨の入り口の太陽鼓型のトンネルの写真が掲載されていた。2006年には気がつかなかったが、茶工場の前の記念碑上のモニュメントも、太鼓をかたどったものであった（太陽の光を連想させる、太鼓の周りの突起はついていないが）。
- 4) シーサンパンナ・タイ族自治州の元州長である、召存信氏のサインが入れられた。

以上の四点に加えて、もう一つの変化は、タイトルがついていないので断定は出来ないが、上述の緑を基調としたパンフレットに挟んで渡されるのではないかとと思われる、6頁からなる小型のパンフレットが追加されたことである。各頁に、茶そのものだけでなく、民族衣装を着たチーヌオ族の人々の写真が配置され、説明文もチーヌオ族の茶文化について解説したものであった。全文を紹介することはできないが、要点を以下に挙げておく。

- 1) 「中国銘茶の中には数千年の歴史を持つものがあるが、プーアル茶にも千年以上の歴史があり、マクロ的に見れば、どちらも文字を持った鉄器時代以後の茶文化に属する。これに対して、現在でも生きた化石のように存在している“攸楽古茶”シリーズは、原始採集時代に副食としていた涼拌茶（お茶の冷菜）、火燎鮮茶（ほうじ茶のことか？）、植物の葉や茎を用いて焙じた“天工茶”、さらには文明時代の鉄鍋で蒸した茶に近づいている竹筒茶まで、中国の茶文化の源流を窺うことができる。」
- 2) 「チーヌオ語で、茶のことを「ラボ」と呼ぶが、「ラ」は「依拠する」、「ボ」は「芽」のことであり、「依存して生存する芽」の意味である。チーヌオ語の茶樹に対する呼称は五種類ある。第一が「ラボアズ」で「茶樹」、第二が「ラボアブラ」で「野生の茶樹」、背の高い品種と背の低い品種の二種類がある。第三は「ラボズリ」で「老茶樹」、第四が「ラボズモ」で「大母茶樹」、第五が「ジエズ」で「揺銭樹」である。
- 3) 「攸楽古茶シリーズには、以下のようなものがある。1. 涼拌茶（合計 12 種類）：①涼拌茶、②ガリロー涼拌茶、③臭菜涼拌茶、④鶏肉涼拌茶、⑤かに涼拌茶、⑥雑拌涼拌茶、⑦酸っぱい蟻の卵の涼拌茶、⑧熟甜笋涼拌茶、⑨生甜笋涼拌茶、⑩白参涼拌茶、⑪キノコ涼拌茶、⑫野獸乾し肉涼拌茶、⑬涼拌茶オードブルまたは百衲涼拌茶、以上

中国雲南における定点観測の継続（2）

13種類の凉拌茶は、大自然の旬の素材を用いており、清湿解毒、食欲増進、健康増進の効果がある。2. 植物の葉や茎を用いて焙じた“天工茶”（合計4種類）：①冬果葉茶、②大白葉茶、③芭蕉葉茶、④掃把花茶または清涼茶。3. 竹筒茶、4. 鉄鍋蒸茶（具体的には不明な点もあるが、だいたいのことはおわかりいただけるであろう）。

<商品作物の現状>

政府のテモクーの際、羅建寧郷長の挨拶の中で、2006年のチヌオ郷の財政、商品作物などについての公式統計への言及があった。

これによれば、2006年の全郷農村経済総収入は4617万元、農民一人当たり純収入は2190元、一人当たりの占有する糧食は543キログラムで、商品作物はゴム、茶葉、砂仁が三大基幹産業で、ゴムの作付面積は7.8万畝、生産量は1832トン、茶葉は1.5万畝、干毛茶の生産量367.9トン、果物は4207畝、生産量は2544トンである。この報告でも、後半はもっぱらチヌオ茶のことが主要な話題となった。

3. ネスレコーヒー実験農場

ここでは、2006年2月に行った、ネスレコーヒー実験農場での山雲輝氏からの聞き取りについて述べる。なお、諸般の事情で、2007年2月には聞き取りを行っていない。

<コーヒー市場の動向>

2006年のコーヒー豆買い取り価格は、キロ当たり20元、最高で23元に達し、昨年10数元から大きく上昇した。価格、気候ともに良好なことから、個人で栽培する農民も増加し、100畝以上の規模であれば、買い付けに来る。これまでコーヒーを栽培していた農民の周囲に住んでいる農民が新たにコーヒー栽培を始める傾向がある。ただし、どこでも成功しているわけではなく、例えばチヌオ山でも500畝植えたが、実が熟しても地面に落ちてしまう問題が生じており、これは水分が多すぎると実が腐ってしまうこと、また逆に日射が多すぎると渴いて実が落ちてしまうことによる。

国際価格の変動については、1999年以来、2003年まで価格の低落が続いたが、主要にはベトナムやブラジルで栽培面積が急速に拡大したためである。その後は、コストが合わなくなった人が栽培をやめたり、ベトナム、ブラジルで、質がよくない地域での栽培を制限したりしたことが影響し、価格が回復している。

雲南省では、コーヒー栽培地の総面積は、少なくとも2-3万畝で、主に思茅地区の普文付近で、幹線道路沿いの農民の栽培面積が拡大している。

<高級茶ブーム>

コーヒーも伸びているが、それよりも大きな伸びを示しているのが茶葉である。2006 年では、価格が以前の三倍になり、キロ当たり 3-5 元にまで上昇した。現在の問題は、海外へ輸出する際の残留農薬の問題で、WTO に中国が加盟して以来、基準値を超えないものだけが輸出できるが、国内の需要の伸びにより、この基準を満たさないものが、国内でよく売れているという現象が起こっている。福建、浙江のものは、残留農薬が少なく、輸出に成功している。ただし、日本では、全体として中国からの茶葉の輸入量は少ない。農業税が段階的に廃止されていることも農民の励みになり、シーサンパンナのプーアル茶は 2005 年からブームになっている。輸出の伸びと同時に、上述の七子餅茶の国内需要が増えている。

中国の茶葉の最大の問題は、残留農薬の問題であり、雲南では貧困地域で栽培するために、技術が低く、農薬に頼る傾向が強いので、価格は高くない。もしも、基準値を満たせば、価格は間違いなく上昇するであろう。また、南糯山の野生茶の価格は高いが、生産量は少ない。

コーヒーに関して言えば、多くのいわゆる「有機コーヒー」として売られているものは、実際にはあまり信頼できないという問題がある。コーヒーの場合には、そもそも農薬が残留しにくいという特性がある。本来の（無農薬）有機コーヒーを栽培するには、コストがかなり、価格が二倍になってしまう。これに対して、茶葉は農薬が残留しやすいという特性がある。

<雲南コーヒーの今後>

雲南では、小粒のアラビカ種を栽培しているが、ベトナムやタイでは、ロブスタ種を栽培している。また、タイではネスレの指導の元に栽培している場所もあるが、ネスレのコーヒーとは言えない場合もあり、価格も低い。雲南では、ネスレが援助するが、ネスレ以外に売ることが自由である。

雲南でのコーヒー栽培の最大の問題は、どのようにして国際市場に進出するかという問題である。現在では、雲南でも元手のある人は、経験の有無を問わず、輸出したいと考えているが、国内以外では、台湾が買い付けに来るぐらいで、他の国からは買い付けに来ない。また、国内でも、レギュラーコーヒーを楽しむ人は、言わば日本で茶道を楽しむようなものである。

この農場についていえば、栽培面積 250 畝のうち、230 畝で結実し、生産量は 35 トン、価格はキロ当たり 20 円で、収入は 70 万円である。農場としては成功していると言える。ただし、現在は管理のレベルを高めることが、いっそう求められている。この背景には、ネスレの粉ミルクがリコールにあった問題があり、これがコーヒーにも影響し、農民の管理レベルの向上が求められている。（こちらからの質問に対して）日本で一部に流通している雲南コーヒーは、昆明市郊外にある会社が日本に輸出したものであろう。

中国雲南における定点観測の継続（2）

コーヒーは大衆化が必要であり、品質はそれほどよくなくても、生産量が多いことが求められる。しかし、雲南コーヒーの品質は、実際には世界的に見ても良質で、とくに良質のアラビカ種の生産は世界でも多くない。一つの問題は、栽培面積がまだ少なく、生産量が少ないことが、国際的なブランドイメージを確立できていない原因であり、同時に市場が大きくないことから、買い付けに来る会社が少ないことが挙げられる。今後、コーヒーを愛好する人が増えれば、これらも拡大していくのではないだろうか。

以上の、山雲輝氏による雲南コーヒーブランドの確立に関する分析には、筆者も共感する点がある。昆明の高級ホテルや徐々に増えてきた喫茶店の一部で出される雲南コーヒーは、たしかに味も香りも一流であろう。質の面での競争力は十分にあると思われる。問題は、宣伝、広告の問題であり、そこで問題になるのが、「雲南」というブランドイメージになるのではないだろうか。

おわりに

東京経済大学雲南研究所、そしてその前身の同雲南研究会が調査を開始してから、すでに十年以上になる。近年では、代表の村上勝彦教授が学長の激務に追われ、当初に比べれば、言わば細く長くこの調査研究を続けて来た。その中で、継続調査を行って来た、ハニ族の村落、チヌオ族のテモクーにしても、非常に大きな変化があり、まさに隔世の感がある。そして、撮影し続けて来た写真やフィールドノートに書かれたスケッチを比較すると、こうした変化をさらに実感することができる。今後は、こうした十年以上にわたる定点観測を、できるだけわかりやすい形で総括し、読者の皆様に御覧いただけるよう努力したい。

付記：本調査報告は、2006年度東京経済大学個人研究助成費（C06-04）による研究成果の一部である。